

「失われた10年」の債権放棄： メインバンクの超過負担からのインプリケーション

千葉商科大学 鯉渕 賢

伝統的な日本の銀行-企業間関係を巡る議論では、顧客企業の財務危機時にメインバンクがどの程度積極的に企業救済を主導するかは、銀行-企業間関係におけるメインバンクの「名声の維持」の問題として考えられてきた。本稿では、協力ゲームの理論の枠組みを用いて、1990年代後半以降の主要な債権放棄事例におけるメインバンクの債権放棄負担の決定要因を分析し、次に1998年から2005年にかけての日本の主な上場企業の債権放棄事例をサンプルにして回帰分析を行った。そして、サンプル事例間で観察されるメインバンクの超過負担の程度の相違は、債権放棄前までのメインバンク関係の親密度と統計的に有意な相関を示していることを見出した。本稿の結果は、債権放棄時に観察される超過負担の大きさが債権放棄交渉におけるメインバンク主導の程度を表す指標であることを示すと共に、日本の伝統的なメインバンク主導の古い企業救済のルールが、金融自由化を経て大きく変貌した2000年代初頭に至っても大企業の債権放棄事例においてさえ広く適用され続けたことを強く示唆している。

キーワード：債権放棄，メインバンク，名声